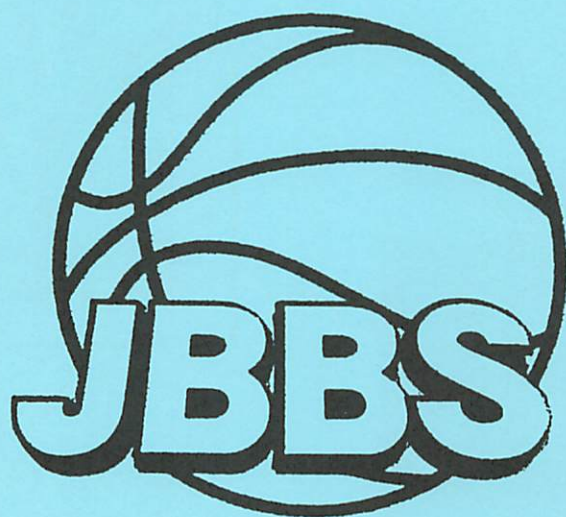


バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No:22



2003年12月

日本バスケットボール振興会

八詩 (はちうた)
BISTRO-HACHI-UTA

BISTRO 八詩

渋谷の喧騒を忘れそうな和める空間で、旬の素材を。

ごまや

BISTRO ごまや

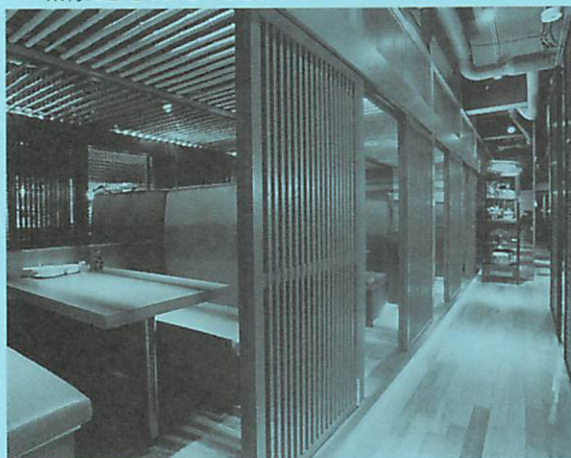
渋谷の真ん中と思えない、まるで大人の隠れ家。



ごまや

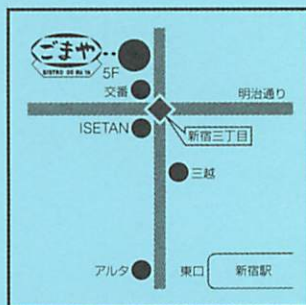
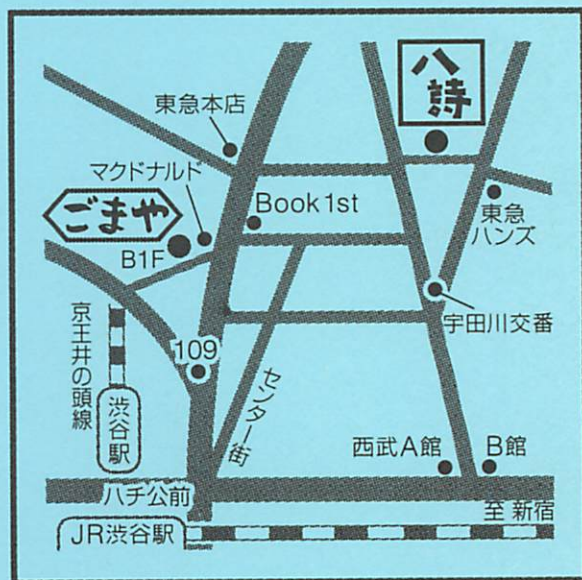
BISTRO ごまや・新宿店

素材にこだわった料理とひとときを、和みの空間で。



おすすめメニュー

手造り胡麻豆腐
季節の野菜で胡麻よこし
豚肉ニンニク味噌巻き
生タコの青のり揚げ
ピリッと胡麻の葉炒飯
生ウニたっぷりスパゲッティー



東京都新宿区新宿3-4-1
カルムビル5F
tel:03-5269-8158
Open 11:30~Last Order 22:45
"年中無休" (120席(個室大小12部屋))

JACKPOT GROUP OFFICE ジャックポットグループ・オフィス
〒155-0032 東京都世田谷区代沢5-35-8 岩瀬ビル1F
TEL 03-3413-9555 / FAX 03-3412-7332 www.jack-pot.co.jp

目 次

○ 平成15年秋季理事会報告概要・	3
○ 懇親会報告 今年も盛況裡に・	7
○ 特別寄稿 記者の目から見た日本のバスケットボール・	9
○ 特集 これからの日本の強化・	普及部会 11
—— ミニからナショナルチームまでの一貫指導体制を目指して —— 佐藤久夫 専任コーチに訊く	
○ 風神雷神 インテリジェントなスポーツなのだ・	青木 勇作 20
○ わが軌跡 チームと筆友に感謝・	河村 彰之輔 23
○ 会員だより 私とバスケットボール・	手塚 純 26
アメリカのバスケットボール・	山本 哲哉 28
楽しくて幸せ・	杉浦 八重子 30
○ 日本バスケットボール協会ルール変更・	32
○ オリンピック出場へ！頑張れ全日本！・	39
○ 第20回アジア女子選手権仙台大会・各団体大会スケジュール・	41
○ 平成16年度日本協会スケジュール・	42
○ 全国高校選抜優勝大会組み合わせ・	43
JOMOウィンターカップ	
○ 訃報・事務局だより・	45
○ プラザ こぼればなし・	46

特別寄稿

記者の目から見た日本のバスケット



正田 裕生

「バスケットの指導者って、なにを目標にやっているの？幼稚じゃない？」
な、なに！？。聞き捨てならない。バスケットボールの担当記者として、ましてや高校生の時に多少バスケットに関わった者としては、真意を聞かずにはいられない。

テニスの強化に携わっているその人は、こう言った。

「テニスのコーチは、無理かもしれないと思いながらも世界のナンバーワン選手を育てようと必死になっている。バスケットにはそれが見られない。テレビで試合を見ていても、何のためにやっているのかまったく分からない。本当につまらない」。こんな主旨の話をしていた。

これにも反論せずにはいられない。バスケット界のどれだけのコーチが本場米国へ行ってフォーメーションや指導法などを学んだり、人脈を築いていることか。コート上で理想のバスケットを実現させるために、どれだけの時間と労力を割いていることか・・・。

だだ、正直に言って、この人の意見にうなずける面もある。他の競技とも比べてみて「つまらない」と思える部分があるのは、日本のバスケットの、そして日本のスポーツ文化の閉塞感を表しているようにも思える。

「能代のバスケットをやっているのは、卒業後、選手は通用しない」。バスケットの指導者からこんな見解を聞くことがよくある。当然、異論も多いだろう。ここで能代工が打ち立ててきた偉業を否定するつもりなど毛頭ないし、私にそんな資格もない。ただ、高校時代にひたすらに走るバスケットを追及し、チームとして強い集団をつくってインターハイや全国高校選抜優勝大会に優勝するのと、NBAに通用する選手を育て上げることとは違うだろう。「結局、指導者はチームとして結果を残さなければならない。だから、個人技を高めるより“勝てるバスケットをしよう”とする。そうすると選手個人の可能性は伸ばせない」。

こんな言葉を口にするバスケット関係者もいる。

「夢」が見当たらないのだ。バスケットボールをやっている子供たち、指導している大人たちがNBAでプレーすることを本気で目指しているだろうか。NBAで通用するために、何が必要で何を伸ばさなければならないかを考え、高い個人技を身に付けようとしている選手や指導者がどれだけいるだろうか。そうでなくても、日本をオリンピックへ導ける選手をつくろう、という高い意識をもって、どれだけのコーチが指導しているだろうか。

田臥勇太がデンバー・ナゲッツと契約した。現在（10月初め）はまだチームに残っている。田臥の実力で決してNBAで通用するとは、私自身思っていない。NBAではビジネスが絡み“商品価値”も必要だ。むしろ「絶対無理」と見る関係者が多い。開幕の登録選手に残れる可能性はわずかだろう。しかし、少なくとも、田臥の挑戦には夢がある。高校時代に3年連続で全国大会3冠。プリガムヤング大ハワイへの留学。派手なプレーに加

え、173cmの小柄な体ながらスピードで勝負する「格好良さ」は、まさしく「スター選手」だ。

だから、様々な人がサポートし、日本選手初の「おとぎ話」に乗ってくる。少なくとも、プレシーズンマッチでトップ選手と相まみえるシーンがあるかもしれない。それだけで、胸がわくわくするファンも多いはずだ。

田臥は、日本バスケットの復興の切り札だったはず。実力はともかく、最も客を呼べる選手であったことは間違いない。昨季、トヨタ自動車に入団し、多くのファンを会場に呼んだのも事実だ。1976年モントリオール大会を最後に五輪出場がなく、企業の休廃部で停滞するムードを打破できる最後で最高のカードだったのではないか。その田臥は、わずか1シーズンで日本のトップ・リーグを去ってしまった。それほど、日本のスーパーリーグには魅力がなかったのだ。内容のなさや選手の意識の低さに「見て損をした」と思う試合もある。それだけでなく、リーグ自体が将来発展していく希望を提示していない。自国の人気ナンバーワン選手でリーグを再生させることができなかった。寂しいというほかない。「せっかくのチャンスだったのに、日本のバスケット界として田臥を引き留めることができなかったのか。せっかく盛り上がってきたのに」という、ある監督の言葉に共感する人が多かったと思う。

田臥に“振られた”日本のバスケット界に、打開策があるのか。ここ何年か、「プロリーグ化」という構想がくすぶっている。しかし、スーパーリーグのチームを所有する企業にとって「プロ」は禁句といわれて久しい。「もうからない。赤字で運営できない」という発想しか浮かんでこないからだ。そもそも「プロリーグ」という言葉の意味を本当に理解しているバスケット界の人間がどれだけいるかも疑わしい。それほど、これまでの議論は稚拙だった。「プロ」という発展的な形態より、企業は生き残りで必死だ。いつ休部になるかわからない危機感がある。チーム名を挙げて「〇〇はあぶない」などとささやかれることも多い。地域に根を張って行政や市民を巻き込んだ形のクラブ化を模索している企業も多い。多くの人の努力がありながら、ことは簡単に好転しない。田臥が去って行ったのも無理もないかもしれない。今年の冬季アジア大会を最後に、日本で国際総合大会が開かれる予定はない。五輪開催地に名乗りを上げる自治体もない。日本のスポーツ界自体に夢が見つけにくくなっている。

この閉塞感を打開するのに、日本協会の責任は大きい。選手の一貫指導を含め、高い個人技を磨いて世界へ送り出す強化策や態勢の充実が求められる。そして、2006年、さいたま市などでの世界選手権へ向けて日本を強化しPRを含めて人気度を上げることが課題だ。今回の男子アジア選手権で6位に終わったものの、大幅に若手に切り替えたチームは成長の芽を見せた。パブリセビッチ氏（クロアチア）という外国人監督を登用し、大甕を振るったよい面が出た。女子は1月、仙台でのアジア選手権で五輪出場権を獲得することが責務だ。

企業にとっては、抱えるチームの競技が五輪に出場できるかどうかで処遇が大きく変わってくるからだ。

競技人口の多さ、競技としての面白さと人気の高さ。日本のバスケット界の現状は、この競技が持つ本来の魅力とはかけ離れている。学閥、派閥、責任のなすり合い…。つまらない抗争は、見たくない。時間がかかっても、殻を破った新しい姿に生まれ変わる日がくるのを望んでいる。

[共同通信社記者]

特 集

これからの日本の強化

—— ミニからナショナルチームまでの一貫体制を目指して ——

日本協会専任コーチ佐藤久夫氏と懇談

担当：普及部会

実施日 平成15年10月10日（金） 振興会事務所にて

出席者

ゲスト (財)日本バスケットボール協会 強化本部専任コーチ 佐藤 久夫氏
主催者側 普及部会 大塚、稲垣、手嶋、都崎、横山、小笠原、大内
司 会 渡辺

ゲスト略歴



昭和24年（1949）宮城県仙台市生まれ。日体大卒業後高校教員のかたわらバスケットボール指導者を経験。母校仙台高校に勤務後、第30回（1999）、第31回と全国高校選抜優勝大会で2連覇を達成。平成3年度（1991）から全日本男子ジュニアチームのスタッフに加わり、平成11年（1999）の第6回世界ジュニア選手権（ポルトガル）および平成13年の第3回ヤングメン世界選手権（さいたま）に日本代表チームを率いて出場。平成14年3月仙台高校を退職して日本協会の専任コーチに就任。

◇はじめに

日本バスケットボール協会は、平成14年（2002）5月、それまでの強化体制を抜本的に見直し、「世界で勝てる」チームづくりを目標に、20年先までをも見据えた『JABBA変革21』と称する中長期計画を発表しました。

このことについては、既刊平成14年12月号本誌に掲載の「日本協会石川副会長兼専務理事に伺う」という特集記事、ならびにそれに付した「中長期計画の内容（概要）」において皆様に報告しているとおります。（念のため本記事の末尾にもその一部を再掲いたします）

その中長期計画20年構想の3本柱として、（1）日本代表チームの強化（2）底辺の拡充と選手の育成強化（3）指導者の育成 が打ち出されましたが、特に（2）の問題につきましては、ミニからの一貫強化育成システム“エンデバー制度”の実施がその中心テーマとなっています。

このたび、私ども普及部会がお招きしたゲスト佐藤久夫氏は、協会の専任コーチとして、主にこの基本命題についての情報伝達や現場指導という重責を担われつつ、全国的に先駆者的活動を展開中の方です。

ご多忙の折から貴重な時間を割いてご出席いただいたことに感謝しますと共に、今回の強化に関するお話の内容を、会報“プラザ”の紙面を通じ、できるだけ多くの皆様にお伝えしたいと思います。以下その節のお話を整理し同氏のご了解をいただきました結果をご報告します。

—— 日本協会の中長期計画「20年構想」の中で、底辺の拡充と選手の育成強化を目標に、ミニからの一貫強化システム「エンデバー制度」が計画されました。(本稿末尾参照) このような協会基本方針を踏まえて、まず佐藤さんが日本協会専任コーチに就任された経緯について伺いたいのですが。

一昨年「さいたま」のヤングメン世界大会がありました。その前から私はジュニアチームの強化を担当して、ポルトガルでのジュニア世界選手権大会に参加し、その後ほぼ同じメンバーで「さいたま」でのヤングメン世界選手権大会を経験したわけです。ジュニアの世界選手権が終わってから1年半で、再度世界レベルでの試合をすることができたのです。日本の高校3年生が大学2年生になったその2年間について、日本の選手とその当時世界から集まってきた同じ世代の選手とを比べたとき、それぞれの成長の度合いには格段の差がついてきていることを痛切に感じました。

高校生、ジュニアの段階で世界に行ったときには、高さの問題などいろいろありはしましたが、それでも勝負にはなったと思います。ところが「さいたま」では、戦っていくうちにどうしようもないジレンマ、短期間では解決できない「開き」というものを感じたのですが、それは主として選手の経験と体力的な問題でした。

日本のバスケットボールがオリンピックをはじめ世界の舞台で活躍できるようになって欲しいというのは誰しもの願いですから、そうした夢に一步でも近づくための礎にでもなれたらと思い、私なりの決心をして日本協会の専任コーチに就任させていただいたわけです。

—— 新しい方向への模索の過程について簡単にご説明ください。

私が就任したころに日本人の特性を活かした「変革21」という強化策が尾崎前日本協会会長から発表されました。この中で大きく取り上げられていたのが“日本のバスケットボールを強くしたい。日本のバスケットの型を構築して、それをミニバスケットボール、中学、高校まで広げていくという、一貫指導のシステムによって日本のトップレベルの強化を図りたい”という考え方でした。

そして次に、「変革21」の中で一貫指導を「エンデバー」というシステムにより情報伝達していこうという考え方が提唱されました。皆さんの協力を得ながら、平成14年度、日本のオリジナルバスケットボールが目指すべき方向を、何回かの会議を経て構築しました。

“日本人の特性を活かしたバスケットボール”を捨ててはいけないという視点に立って、日本人の優れている部分は何かを考えて見ますと、頭を使うということ、知的な面、非常に勤勉努力する面などがありますが、他方、若干精神的な面がもろくなっているのではないかといったことも討議されました。“日本人の特性を活かした知的なバスケットボール”、それに“努力の積み重ねによって成されるバスケットボール”、そして“精神面の強化”、この三つを主体にして考えていったのです。

そして、知的な部分をバスケットに活かすためには繊細で緻密なバスケットボールを展開していく必要があると思いました。

今の世界の実態は体力面も含め日本と相当な格差があります。昨年インディアナポリスで世界選手権を見て、世界の凄さを肌感じてきましたが、世界のバスケットは、最終的には選手の体力と能力で勝負をしていることが多いです。ただ日本の場合は、同じような面で勝負しようとしても永久にアジアの中でさえ勝てないかも知れません。知的プレイと

しては、ひとつには変幻自在なディフェンス、たとえば、かつて忍者ディフェンスというものがありました。そのような考え方もこれからの日本のバスケットに浸透させなくてはいけないだろうと思いました。またオフェンス面では、非常に時間はかかりますが、パスをたくさん使うことで、より平面的なプレイができるようになるであろうと考えました。両方とも非常に頭を使うことであり、“予測”や“判断”の能力が必要ですが、この部分では日本人にも可能性を期待できるのではないかと思います。また、勤勉という日本人の特性はイコール体力を作ることにつながるし、それがまた平面バスケットへとつながるのではないかと思います。

次は、必然的に“高さ”への挑戦ですが、この“高さ”の意味は、サイズへの挑戦でもあるし、またレベルへの挑戦の意味でもあるだろうと考えられます。かつて日本人には武士道、大和魂、あるいは根性などと表現される精神面の強さが浸透していましたが、そうした部分は世界あるいはアジアに比べて一番弱くなってきました。オリジナルバスケットボールを構築する際には、そのあたりもうまく指導しながら育てていかなくてはならないということなども話し合われました。

—— 世界あるいはアジアの中で全日本が然るべき地位を保つためにも必要と考えられている「日本のオリジナルバスケットボール」とは具体的にどのようなものですか。

オリジナルバスケットボールを構築したその内容をもとにして、つまりミニ、中学、高校、それから大学、そしてナショナルチームまで、同じ日本人としてどのように世界やアジアで戦うか、そのためには一貫指導の面で何が必要かを技術的に追求しました。

ミニとしては、まず必要と思われる基本技術を経験させよう、そしてバスケットがミニで終わらないように“楽しい、面白い”という感覚を持たせてあげよう。中学生になったら、それらを更にスムーズに消化できるように。そしてオリジナルバスケットボールでは、ポジションにこだわらないオールラウンドプレイヤーを育てることをも目標にしています。

平面バスケットボールをするのであれば、皆がどこのポジションでもこなせなければいけません。中学の段階でオールラウンドプレイヤーになれる資質を身につけさせ、高校においては、基本技術をスピーディに力強くできるようにすることが必要ですし、また、対応力も身につけさせなければなりません。去年は、高校2年生のアンダー18までを全国9ブロックにわけ、指導者は変わりましたが、そのブロックの中で選手たちに同じドリルを経験させることからスタートしました。各県4名程度の選手をブロック単位で集めて、全国同じドリルを行い、その中で(1)選手の発掘、(2)選手の育成、そして同時に(3)そのブロックの指導者の人たちに対する育成、という三つの狙いを持って実施しました。

現在子どもたちがナショナルチームの候補選手になれる年齢、20年後までの構想として「変革21」があるわけですが、これは日本のオリジナルバスケットボールの構築を目標に、日本代表となり得る選手や指導者の発掘、育成、強化を図ることを目的とし、エンデバーはその情報を各ブロックを通じて伝達する手段である、と考えています。去年はブロックエンデバーの段階でしたが、今年は高校1、2年生と中学3年生をブロックにしてアンダー18のエンデバー、それから中学1、2年生と小学6年生を一緒にしてアンダー15のエンデバー、をそれぞれブロックで開催する予定です。このようなことが“一貫指導”の考え方ですが、選手の発掘育成を行うと同時に、選手たちと一緒に活動している指導者をも育成しているわけです。

—— 強調されている中高生の精神面の強化については、どのように身につけさせようとお考えですか。

努力することは体力づくりにもつながりますが、“高さ”に挑戦する意思を選手の身につけさせることが大切だと考えます。メンタルトレーニングをクリニックのなかで指導することは難しいのですが、ひとつには選手たちがプレイ中に声を出すことが大事ではないかと思います。選手たちがコートの中で大きな声を出して守り連携をとることが必要です。大声を出せる選手、指示待ちプレイヤーでなく指示できる選手がオールラウンドプレイヤーということになります。自信があれば子どもたちは大きな声を出せるのです。メンタル面を強くするために、少なくとも“声を出すことは技術である”という考え方で指導しています。また、ルーズボールは“粘り”の表現でもあり、ルーズボールを取るときにはこうやって頑張るんだよということを指導しています。指示を待っていると声が出ないですから、大きな選手にガードの練習をさせることも良いと思います。

—— 特に、声を出すことはミニの段階から大切ですね。声を掛け合うことが“必要な技術”の一部として認識されなければいけませんね。

高校になっても声が出ていませんが、声を出すことによってチームとしてのコミュニケーションは随分と変わります。

—— 就任された段階で既にエンデバー制度は確立していたのですか。

まだ制度自体は確立されておらず、私もオリジナルバスケットボールを構築するたたき台とか、エンデバーで使用するドリルなどの作成を担当しました。すべての都道府県協会の理事長、ブロック長などの方々と連絡を取り合い、役割分担をして制度を作成しました。ただ、総務関係はまた別の方をお願いしました。

—— この制度についてはコーチご自身も十分納得されていますか。

エンデバー制度自体は非常に大事なことでと考えています。特に、一貫指導について、日本のバスケットボールはこうなんだという考え方を上から下まで全体に伝えることが大切です。ミニの子どもたちが将来のための技術として必要とすることについて、指導者も自分たちの指導すべきことを明確に理解できてくるのではないかと思います。また、この制度の利点として、逆に下から上に、たとえば地区から県に、さらにまたブロックへと広がり、それがトップまでつながっていきます。子どもたちには挑戦する気持ちがありますから、一貫指導ということは本当に大事ですし、今の段階ではこの制度は日本の実情にマッチしているのではないかと考えています。

日本には4500校の高校チームがあり、そのチーム一つ一つが“勝ちたい”と考えています。高校はナショナルチームのためにチームづくりをしているわけではないのです。

ですから、“自分たちが勝ちたい”、“自分たちのチームを作りたい”という高校の先生方の思いの中で、“ナショナルチームのメンバーになれる選手”の育成をもお願いしたいということなのです。両方を実現していく形としてはこの制度しか考えられません。

日本はヨーロッパスタイルのようにクラブチームを作って、その連合体がナショナルチームになるといった環境ではないと思います。4500校を大事にしていかなくは日本のバスケットは育たないのではないかという気がするのです。

—— 現地に行かれて高校の先生方にそのような話をされての反応は如何ですか。

高校の先生は自分の育てた選手が次に大学に行ってナショナルチームに入ることを非常に喜ばしいと考えています。ただ、エンデバーの仕組みに先生たちがどのように関わっていくかについて理解を得るには、もう少し時間が必要かと思います。全国の先生方、そしてチームを持っている人たち、協会の関係者ら各位のご理解をいただくことは今後とも続けていかななくてはなりません。

—— 地方協会の関係者、先生方からこの考え方について異論は出てきませんか。

この制度を説明すると素晴らしいことだと理解してくれますが、これを広める手段、情報を伝達する手段が不足しているのではないかと、という懸念について指摘されます。

—— 関係者の方たちには同じレベルで理解し伝達してもらわなければなりませんね。

制度の内容を説明すると皆さんに理解していただけますが、これからはオリジナルバスケットボールもバージョンアップしていかなければなりませんから、毎年オリジナルバスケットボールの会議を開いて必要な時期に改善し伝達していく必要があります。

—— 昨年は何回くらいこのような説明を実施されたのですか。

必ずしも“オリジナルバスケットボールを説明してください”ということではなく、協会の指導者育成の一環として公認コーチ資格を取得するために必要とされている講習の中で説明する場合や、ジュニアオールスターチームの選手選抜時の指導に立会う場合、高校生の国体選抜チーム選手選考時、あるいは中学・高校の競技力向上指導の場合など、いろいろな場面で招かれることが多いです。その他単独チームの相談に応じることもあります。

—— 大学のレベルもエンデバーの中に入るわけですが、大学の指導者に対してはどのように取り組んでおられますか。

エンデバーは、最後にはトップエンデバーと称してナショナルチームに近い選手を育成しなくてはなりません。トップエンデバーに大学生は当然入ります。大学生グループの場合は育成よりも強化の方が前面に出るわけで、選手の方も高校時代の段階でかなり選抜されてきています。その他から伸びてきた子どももこの中に入るわけですが、“エンデバー制度の中学・高校の指導を経て、トップエンデバーに入る”のが本来の形であると思います。大学スポーツを活気のあるものにしないと、ボールゲームを強くすることは難しいと思いますね。

—— トップレベルの強化コーチたちとエンデバー制度との密接な関係を明確にする必要があるでしょうね。大学までエンデバーに入るわけであり選手も指導者も一貫指導で育てていくのですから、大学生の試合がエンデバーの姿を実現している模範にならないといけませんね。

大学生にも夢を持たせなければならぬですね。韓国の高校生チームの場合は、30校に圧縮されてナショナルチームに直結するようにし、また、より優れた選手で韓国独自のスタイルを作り出しています。つまりやっていることはナショナルチームも学生も同じで変わりません。したがって突然選手を各チームから選抜して集めても、そんなに苦労しないでチームが作れます。それは基本が同じだからです。誰が指導者になろうと同じ基本を

マスターしていれば少々バスケットが変わろうとも対応できるわけです。

—— 選手たちよりも、むしろ指導者を育てることが大切ですが、指導者に対する指導面はいかがですか。

日本協会の組織の中に、J A B B A公認コーチと指導者の育成部門があります。エンデバーは選手を育成する中で同時に指導者をも育成することを目標にしています。40時間の講習の中にオリジナルバスケットボールを指導する時間をもらって理解を図るとともに、“先生方にはそれぞれ独自の型もおありでしょうが、ここだけは基本練習の中に入れてください”とお願いしているのです。

—— 各段階で身につける基本的技術というのは具体的にどのようなことを考えているのですか。

昨年度まとめた「オリジナルバスケットの概要と育成ドリルの内容」という冊子があります。この中でアンダー12の段階では、バスケットのすべての基本を網羅して欲しいと考えられています。

たとえばミニでは、片手でシュートもパスもできるように指導してください。アジアでもシュートやパスは基本的には片手で行っていますが、これがクイックネス、平面バスケットにつながるのです。基本的ドリルは“経験”をさせることです。

中学では基本を正確に普通にできるように指導してください。“ノーマークは攻めなさい”、“ノーマークはシュートしなさい”、“相手が出てきたら抜きなさい”と単純なことを徹底して教えてください。

高校レベルでは相手もいろいろ変わるわけですから、“指示待ちプレイヤー”とならないよう、基本技術を身につけると共に予測と判断力にもとづく“対応力”を身につけるドリルを行ってください。

いろいろお話し申し上げましたが、まだ緒についたばかりでこれからいよいよ本番を迎えることになりますので、よろしくご支援願います。

—— 本日は大変お忙しいところ、まことに有難うございました。

◇終わりに

思えば、国内における選手育成強化の“一本化”、“一貫性”の確立という問題は、斯界関係者が久しきにわたってその重要性和必要性を痛感すると共に、いろいろな機会にその実現を期待し模索を続けてきた、最も切実な緊急的課題でした。諸般の事情からその緒につくこともできず推移してきたのですが、当然のことながら、本来日本として長期展望に立ち万難を排してこれが実現のため先見性と決断力を発揮すべきであったはずの問題でした。

結局その立ち遅れは、幾星霜を経た今日、世界やアジアにおいても取り残されつつある日本バスケットの現状に象徴されているように思われます。

それはさておき、昨年日本協会がようやくこの難課題に正面から取り組み、世界の流れにこれ以上乗り遅れないよう、日本なりの新強化方針を明確にすると共に、具体的な新システムの導入を発表したことは、まことに喜ばしい画期的、革命的な前進と評価されまし

た。

しかし、今後いかにそれを実行に移して一定の成果を徐々にでも挙げていくかが、きわめて難しくまた大事な問題となることは言を待たないところで、大方の関心と注目そして期待がそこに集中されることになるでしょう。

今回のゲスト佐藤久夫氏は、目下その尖兵として、協会派遣のプロ指導者の立場で、きわめて積極的に真剣な指導を展開されていますが、お話を伺ってその熱い志に感動させられると共に、こうした内容が日本のバスケットを愛する多くの人たちに伝達され徹底されていくことの重要性を痛感いたしました。

過日の日本協会石川副会長兼専務理事の談話にも「“変革21”は、ミニからナショナルチームまで各年齢別に、“エンデバー制度”によって一貫した強化を図っていくという長期計画ですから、結果がすぐに現れるものではありません。しかし、ミニからナショナルまで組織立った強化を行うという、全国津々浦々まで一貫した方針に対し是非ご理解とご協力をお願いしたい」といった言葉がありましたが、まさに日本のバスケット界が一体となってこの大きな課題の実現に立ち向かわなければならないときを迎えています。

行く手にはなお様々の問題点や試行錯誤も生じるでしょうが、お互いのたゆまない努力と工夫の中で、何とかこの共通目標に向かって足並みをそろえて前進を期したいものです。

末尾ながら、佐藤コーチの益々のご健闘とご健康を切にお祈りします。

中長期強化計画「20年構想」の3本柱

(1) 日本代表チームの強化



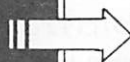
■3カ年計画(2002～2004)
→ 年齢別カテゴリー制度

(2) 底辺の拡充と選手の育成・強化



■ミニからの一貫強化育成システム
→ エンデバー制度

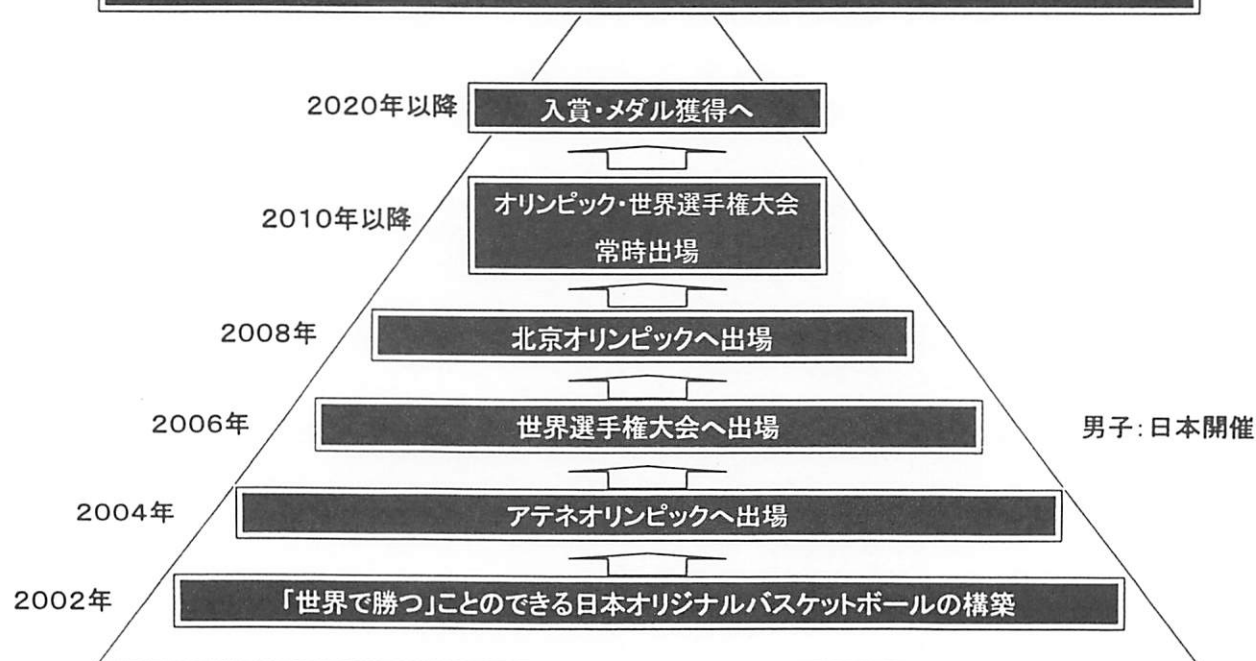
(3) 指導者の育成



■指導者の育成システム
→ コーチライセンス制度

中長期強化計画「20年構想」

「日本代表チームの強化」「底辺の拡充と選手の育成・強化」「指導者の育成」

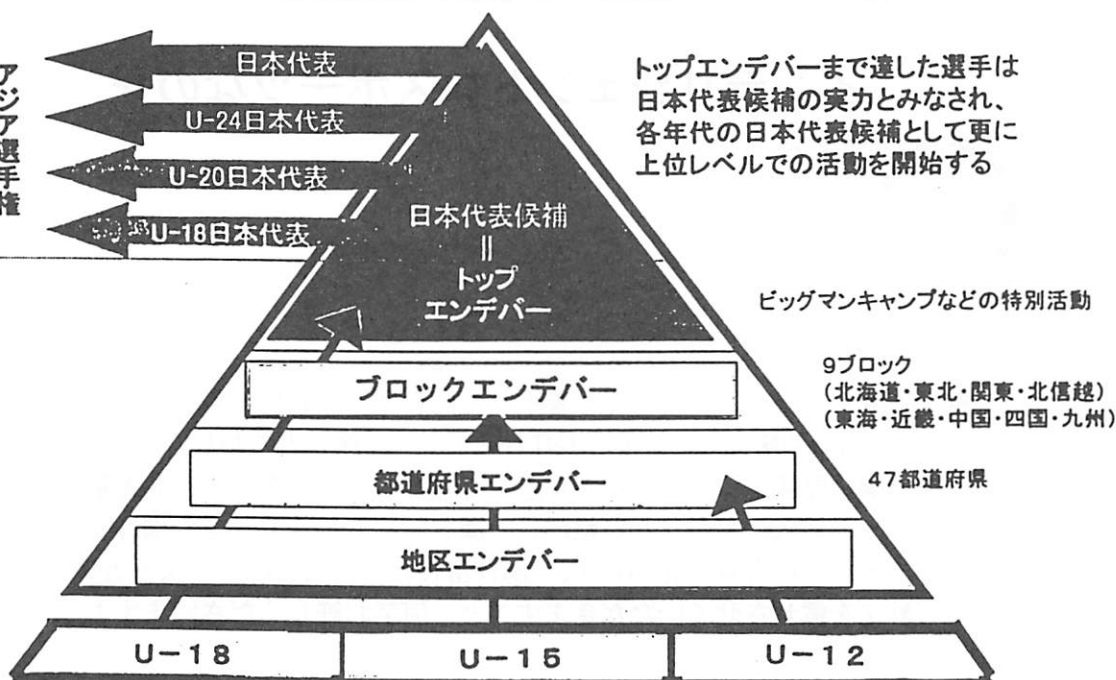


エンデバー制度

日本代表

エンデバー

アジア選手権
世界選手権
オリンピック



① トップエンデバー

- ・年齢別カテゴリー・ピラミッドの頂点にあたる
- ・日本協会が主催・運営する
- ・年間スケジュールの調整を行い、3名程度の指定指導者により、通算20日程度の練習や合宿などを行う

② ブロックエンデバー

- ・北海道・東北・関東・北信越・東海・近畿・中国・四国・九州の9ブロックに分割する
- ・トップエンデバーに向けて、都道府県エンデバーより高度な練習会、合宿、大会、選手選考、指導者講習を実施
- ・トップエンデバー指定指導者と各ブロック担当の日本協会スタッフ、ブロックから選出されたスタッフが運営・指導にあたる

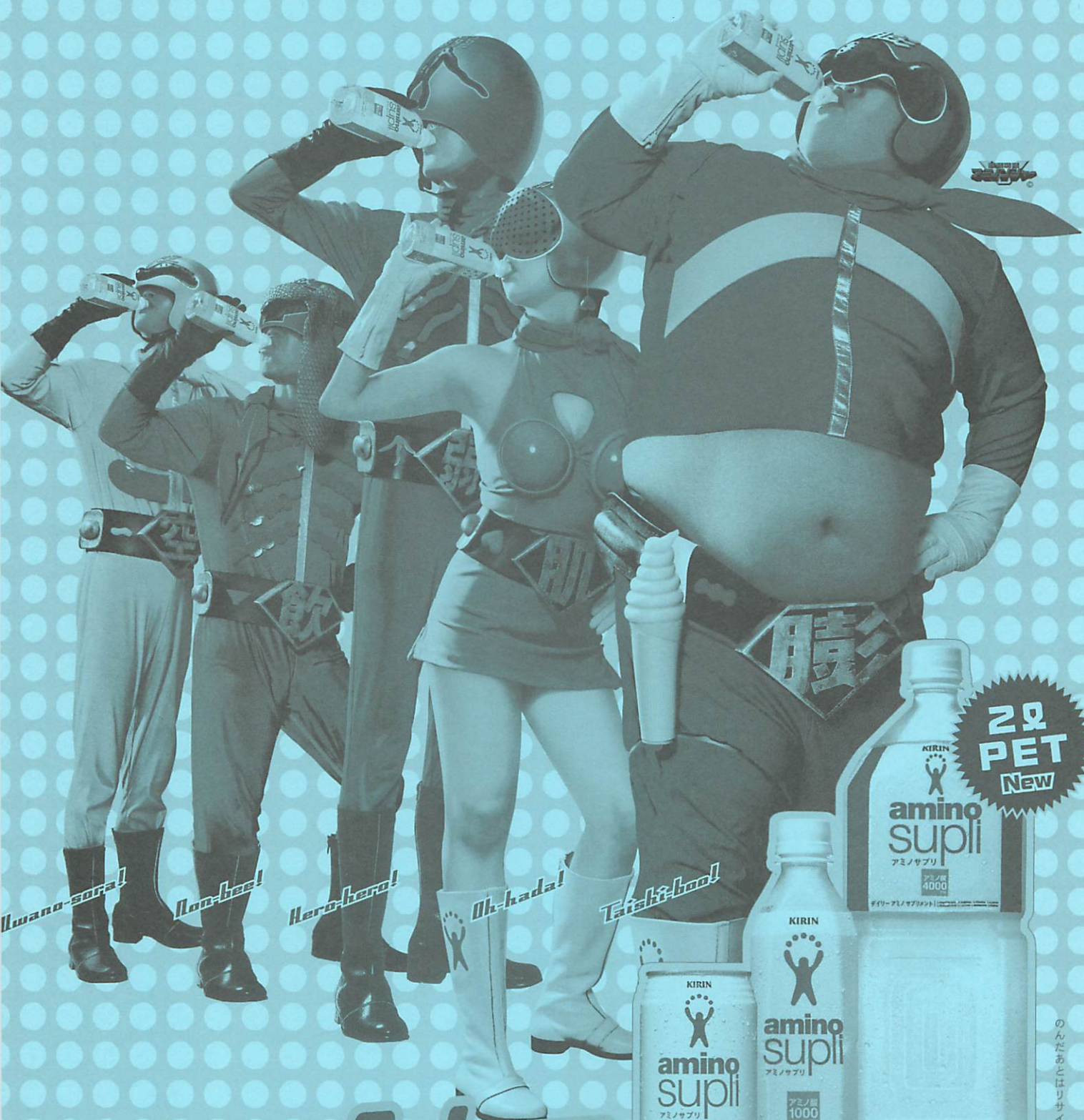
③ 都道府県エンデバー

- ・U-15～U-18の中心活動単位
- ・ブロックエンデバーに向けての選手選考、地区エンデバーより高いレベルでの練習会・指導者講習を行う
- ・ブロック・都道府県から選出されたスタッフが運営・指導にあたる

④ 地区エンデバー

- ・U-12～U-15の中心活動単位
- ・都道府県によって数や規模が変わるが、都道府県を地区や市町村単位などに細分化し編成する

自分を救え。



Let's
アミノサプリ!

キリンビバレッジ

インターネットホームページアドレス <http://www.beverage.co.jp>

molten®

INNER FIRE

情熱とは、あなた自身の内なる炎。

一途にトレーニングに励むときも、

戦いに敗けても挫けず

何度も果敢に挑戦し続けるときも、

熱く、まばゆく燃え続ける。

熾烈な戦いのなかで、

すべての敵を焼き尽くしてしまうまで。



- FIBA (国際バスケットボール連盟) 主催国際大会唯一の公式試合球
- a b c (アジアバスケットボール連盟) 主催大会唯一の公式試合球
- J B L (バスケットボール日本リーグ機構) 主催大会唯一の公式試合球
- WJBL (バスケットボール女子日本リーグ機構) 主催大会唯一の公式試合球

MTB7WW JB2020 7号球 ¥7,800 (メーカー希望小売価格)
国際公認球・検定球・貼り・天然皮革・ワイドチャネル